

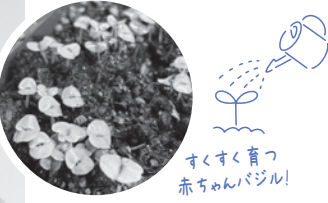
新人さんいらっしゃーい★ dec新人紹介

今年度は2名の新入社員が入りました!今後の抱負と共にご紹介いたします。どうぞよろしくお願いいたします。

充実した環境に感謝の1年!これからも日々成長していけるように頑張ります!



**地域政策研究所 研究員
三原 夕佳**



すくすく育つ
赤ちゃんバジル!

みはら ゆうか
1998年、函館市生まれ。2021年、帯広畜産大学畜産学部卒業。趣味は観葉植物のお世話と映画鑑賞。decでは珍しいインドア派なのかもしれません。

大学で植物系の学科に進み、醸造用ブドウの研究をしていた影響か、常に何かしらの植物を育てています。が、「少しいじめた方が生育する」という大学時代の先生の教えに倣い限界まで水やりを控えたがゆえに、あやうく植物を枯らしかけたことが何度もあります…。それにも懲りず、この春バジルの栽培を始めてみました。早く摘みたてのフレッシュバジルをパスタやピザの上にパラパラ～したいと思う今日この頃です。

decには昨年の3月に入社し、主にシーニックバイウェイ北海道の業務に携わってきました。地域の方々との出会いや、生まれ育った土地に対する熱い想いや優しさに触れることができ、とても充実した1年だったと感じています。

今年度からは雪氷関連の業務に携わることになり、知らない専門用語や初めて使うツールに苦戦する日々ですが、植物の成長過程で学んだように自分自身を成長させる大切な経験であると捉え、精進していきたいと思います。

持ち前のチャレンジ精神で、新しいことに挑戦し続けます!



**調査研究部 研究員
久保田 海斗**



愛する
ヴァンフォーレ甲府の
ユニフォーム!

このネクタイ、実は
ヴァンフォーレ甲府の
です!笑

くぼた かいと
1998年、山梨県甲府市生まれ。日本大学法学部卒業後、札幌国際大学大学院観光学研究科へ進学(2023年修了)。趣味はスポーツ観戦。愛するヴァンフォーレ甲府は昨年天皇杯を制覇し日本一に!思い出すとも泣きそうです。

旅行好きだった家族の影響で、学生時代は友人とサイコロで行先を決める旅(結果西日本一周に)、北海道全市町村制覇の旅、国道1号走破の旅など、様々な旅をしました。面白いと思って始めた旅も最後には辛くなっていることが多かったですが、そういう旅の方が記憶に良く残ります。

20歳の時、まさに旅…もとい修行の様に1人自転車北海道を一周している最中でした。雨に降られ、ずぶ濡れで自転車を漕いでいた時、道路脇に「シーニックバイウェイ」と書いてある看板を見つけました。「シーニックバイウェイってなんだ?」と気になり、大学の図書館で「シーニックバイウェイ北海道」という本を見つけ、読みふけりました。その中で地域の方々为主体となって地域づくりを推進している活動を知り、「自分も関わりたい!」と思ったことがきっかけで、今に至ります。

入社したばかりですが、沢山のことを吸収して、北海道に貢献していけるよう頑張っていきたいです。

「シーニックドライブマップ 2023年度版」発売中! 定価200円(税込)

シーニックドライブマップ2023年度版が発売中です!特集は、北海道らしい絶景が見られる地元オススメ「推し道♥」と、その他道の駅に行ったら必ず食べたい、絶品「道の駅スイーツ」をご紹介します!また、地元ならではの「イチオシ!地元ごはん」も要チェックです!



「道の駅」マップ付き! 全道の道の駅で購入できます!

編集後記

4月上旬、母から「家系図が見つかった」と一本の電話。母は父親のルーツを知りたいとのことで(母が物心つく前に両親が他界しており詳細が不明)、GWに母の「ルーツの旅」が決行となりました。母の実家は青森県弘前市にあり、家系図片手に親戚の家10軒を1日半で訪問してきました(私はほぼ初対面)。辿り着いた父親の実家は、大鰐温泉郷にある創業140年の温泉旅館「ヤマニ仙遊館」で、伊藤博文や太宰治等の著名人が訪れたこともあり、登録有形文化財にもなっているそうです。結果、詳しいことはわからずじまいでしたが当主の方にお会いできたので母としては満足だったのでは。仕事で訪れてた地とそんな関係があったことに驚きでした。(M.K)

趣のあるつくりが歴史を感じる館内



dec monthly vol.452

2023年5月1日発行

発行人

倉内

公嘉

発行所

一般社団法人

北海道開発技術センター

〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目2番17

TEL (011) 738-3363

FAX (011) 738-1889

URL <http://www.decnet.or.jp/>

E-mail dec_info01@decnet.or.jp

〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目2番17

TEL (011) 738-3363

FAX (011) 738-1889

URL <http://www.decnet.or.jp/>

E-mail dec_info01@decnet.or.jp

〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目2番17

TEL (011) 738-3363

FAX (011) 738-1889

URL <http://www.decnet.or.jp/>

E-mail dec_info01@decnet.or.jp

〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目2番17

TEL (011) 738-3363

FAX (011) 738-1889

URL <http://www.decnet.or.jp/>

E-mail dec_info01@decnet.or.jp

〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目2番17



Hokkaido Development Engineering Center

dec monthly

2023.5.1 vol.452 デックマンスリー

● Monthly Topic (マンスリートピック)

● 第5回「ソーシャル×散走」企画コンテスト

北海道参加者報告会

●〈寄稿〉北海道サイクルルート連携協議会の活動



dec Interview >>> 「ソーシャル×散走」企画コンテスト事務局長、一般社団法人散走ネットワーク 理事・事務局長 室谷 恵美 氏

「散走」とは散歩するように自転車でゆったりと走る。その道のりで出会う「何か」を楽しみながら。この新しい自転車文化の展開と普及推進に取り組んでくれたのが室谷恵美さんです。その精力的な取り組みを東京のオフィスにオンラインで伺いました。

長年、自転車の魅力を提唱されてきました。ご自身の自転車との出会いはどのようなものだったのでしょうか。

20代のころ、大阪本社のスポーツ用品会社に勤務し、新規事業で北海道や沖縄に頻繁に出張していました。道内では稚内も含めて各地を回りましたね。地域のスポーツ選手の健康をサポートするような仕事でした。

沖縄出張時にサイクルスポーツイベント「ツール・ド・おきなわ」(1989年開始)の企画に携わっている方に誘われてロングライドに初挑戦したのです。確か70kmぐらい走ったと思いますが、足も腰も痛くてひどい状態でした(笑)。

でも、そのイベントには子どもたちのための一輪車競技大会や国際ロードレース大会に参加する海外の選手を迎えた交流会など多様な企画が含まれ、自転車が子どもから高齢者まで楽しめる乗り物であることに大いに気づかされました。「自転車は人を幸せにするツール(道具)だ」と。この「ツール・ド・おきなわ」体験が自転車業界とかかわる発端になりました。

私はやがて、子育てとの両立が難しいスポーツ用品会社を退職し、フリーの立場で働き始めるのですが、これが世界的な自転車部品メーカー、(株)シマノの文化事業に携わるきっかけとなりました。

この巻頭インタビューでは以前、(株)シマノの神保正彦氏(当時:バイシクルコンポーネント事業部企画部長)に登場いただき、同社の文化発信拠点「OVE(オーブ)南青山」(東京都港区)で本格化していく散走の取り組みを紹介いただきました(2017年3月号掲載)。室谷さんは、このOVEでマネージャーを務めておられたんですね。

「OVE南青山」は2006年にオープンし、私がシマノからの業務委託でOVEの運営に携わったのは13年からです。シマノの基本理念にある「人と自然のふれあいの中で、新しい価値を創造し、健康と喜びに貢献する」ことは、私の使命でもあると、心から共感しています。



カフェを併設したライフクリエーションスペース OVE店内

全国各地に広がってきた「散走」の取り組み。連携と情報共有のためのプラットフォームをつくり、自転車で地元愛を育む人を増やしていきたい。

dec Interview

むろたに えみ

1968年大阪府堺市出身。スポーツ用品会社新規事業を経てマーケティング会社に勤務。2003年からサイクリングイベントの企画運営や自転車まちづくりを支援する活動に携わる。13~21年、(株)シマノの文化発信拠点「OVE(オーブ)」(東京)で散走を核とした企画運営に従事。22年から「ソーシャル×散走」企画コンテスト事務局を担当。同年、(一社)散走ネットワークを設立。茨城県、東京都港区、大田区の自転車活用推進委員を務める。趣味は「昔はウィンドサーフィン、今は散走」。

「OVE」はOpportunity(機会)、Value(価値)、Ease(気軽さ)をコンセプトにしたライフ・クリエーション・スペース。健康的な食を提案するカフェをはじめ、健康や環境に配慮したセレクト商品や多様な文化イベントの開催など、価値あるものを求めようとする人たちの交流の場を目指してつくられました。それはシマノが2000年代初めに提案した「プレミアム・コンフォート・バイク」という高級自転車のマーケティング的な意図もこめられていました。自転車単なる移動手段でなく、健康や環境という社会的価値を実現する乗り物として注目が高まっていく時代を見通し、そうした価値観やライフスタイルに親和性のあるユーザー層をターゲットにOVEは開設され、事業運営されてきました。

散走はそうした背景のなかで生まれたもので、神保さんの言葉を借りれば「コンフォートバイク(楽器)はできたが、それにふさわしい楽しみ方(音楽)がなかった。音楽に相当するのが散走だ」ということです。

私がOVEで初期に携わった活動に『散走読本』(木楽舎2014年)の刊行があります。これはシマノの社員やOVEスタッフとともにファシリテーション方式で「散走とはどういうものか」のキーワードを挙げていき、それを集約したもので、まさに散走のエッセンスが凝縮された内容になっています。この本を広く知ってもらいたいとお披露目会をしたのが「OVE地域交流会」の始まりにつながりました。



2014年OVE出版
「散走読本」

「OVE地域交流会」はOVE南青山を主会場に全国から自転車による地域づくりに関心を持つ人が交流する貴重な場となり、散走の全国への発信源になりました。

地域交流会は2014年から21年までの間に13回開催し、延べ840名が参加しました。自転車まちづくりや自転車観光を実践していたり、取り

組もうとする地域リーダーの方々を対象に実践事例を学び合うワークショップを行いました。16年の自転車活用推進法の成立もあり、各地の自治体関係者などを含め熱心な交流機会に発展していききました。

ただ、当初は散走の普及目的に始めたのが、回を重ねるにつれて扱う領域が広がり、OVEで対応できる範囲を超えてきたということで、22年から自転車業界全体で推進しようと、一般社団法人自転車協会主催となりました。私は引き続き企画運営に携わっています。

散走の取り組みは14年以降、徐々に自治体や地域の団体主催による「散走フォーラム」のようなかたちで全国各地に広がっていききました。代表例を挙げれば、岡山県真庭市は14年6月に散走フォーラムを開催した先駆けのまち。シマノやOVEスタッフによるレクチャーに始まり、散走コースづくりのワークショップや会議、体験会などを行い、四季を通じて楽しめる「散走×真庭」のプログラムをつくって、地域における自転車の新しい楽しみ方を提示しました。

また、大阪府堺市は16年に散走フォーラムを開催し、18年から地元企業や自転車店などの協力のもとに「SAKAI散走アンバサダー養成講座」を実施。散走を通じて地域の魅力発信と自転車の安全利用を推進する人を増やす取り組みが行われています。

北海道では18年に芽室町、江差町で散走のイベントが行われていますね。

そして2017年にスタートしたのが、大学生を対象にした「ソーシャル×散走」企画コンテストですね。

OVE南青山では、2013年から17年まで「ソーシャルプロダクト・アワード」の受賞式が開かれていました。



OVE主催「地域交流会」の様子

これは(一社)ソーシャルプロダクト普及推進協会(APSP)が主催する事業で、環境配慮など人と地球に優しい商品・サービスを「ソーシャルプロダクト」として顕彰するものです。社会課題に意識的な人に自転車のある暮らしを提案する機会としてOVEは協力していましたが、もっと「散走」との結びつきを強めようとOVEとAPSPの共催で新たな取り組みに発展させたのが「ソーシャル×散走」企画コンテストでした。

散走を通じて地域・社会への貢献や課題解決を目指す企画を大学生から募るもので、17年の第1回は、関東は法政大学、関西は京都産業大学などのゼミの参加で小規模に試行的に実施し、第3回(19年)から一般公募を始め、賞金も設けて審査基準なども整えていきました。第4回(20年)は全国自治体への情報発信を強化しようとNPO法人自転車活用推進研究会主催で国交省の後援も得て開催しました。この間、年々水準の高い企画が寄せられるようになっていきました。

そして昨年の第5回は(株)シマノの主催となり、私の仕事もOVE担当でなく、この「ソーシャル×散走」企画コンテストの事務局運営がメインになりました。第1回からさまざまな試行を重ねてきたコンテストですが、第5回では審査基準を見直して、散走の本質的な価値を追求し、地域に住む人が散走を楽しみたくなるまちづくりを目指すことを主眼としました。

賞金は第1チーム30万円、特別賞2チーム各10万円。全国から40チーム151名が参加し、最終審査会は大阪府堺市のシマノ自転車博物館で行われました。そこで、ファイナリスト6チー



2022年「ソーシャル×散走」企画コンテスト最終審査会

ムがプレゼンを行い、大賞に北海道科学大学、特別賞に香川大学、函館大学、の各チームが選ばれました。

第5回を終え、「ソーシャル×散走」企画コンテストの成果や課題についてどう捉えておられるでしょうか。

第5回の成果としては、全国各地から過去最多の応募をいただいたことでしょう。そして過去5回の開催を通じて良かったと思うのは、未来の社会を担う若者たちに自転車の価値や可能性に気づいてもらえたことです。クルマの免許を取る年齢になると自転車に縁遠くなる若者は多いようですが、散走を経験して、また自転車に乗りたくなったとか、スポーツバイクを購入した、という学生さんの声が聞けたのは嬉しいことでした。

コンテストは学生さんたちにとって地域との交流や関係を深める機会になっていますが、大学教員の方々からは、応募に伴うフィールドワークや企画立案などの取り組みが優れた教材になるという意見もいただきました。研究論文の対象として取り組む学生さんも現れ、私も注目しています。

一方、課題と思われるのは、どれだけ素晴らしい企画をつくっても、学生さんにとっては企画して終わりになってしまうことです。企画が地域で実験的に具体化されたとしても、持続的な取り組みにつながりなく、散走を継続して楽しむ学生さんたちの数も限られるでしょう。

第5回コンテスト開催前に関係するさまざまな方に意見をもらいましたが、特に心に残るのは「表彰されなかった多くの企画も大切に、少しでも地域に生かしていくことが大事」という意見。事務局としても全く同感で、選ばれなかった学生さんたちや地域で支えてくださった方々に対して申し訳ない気持ちがあります。ただ、コンテスト形式だからこそ応募のモチベーションが上がるという意見もあり、今後、継続するなかでさらに良いかたちを模索することになると思います。

最後に、「一般社団法人散走ネットワーク」についてお聞かせください。これまでの経験や実績をもとに、さらに発信力のある活動を目指していけるようですね。

これまでの散走の活動でお世話になってきた全国各地の方々、特にコンテストで協力いただいた方や学生さんたちへの感謝もこめて、そうした方々の連携や情報共有に役立つように全国的なネットワークをつくりたいと2022年11月に設立しました。代表理事は大野昌仁氏(元国交省道路局自転車活用推進部参事官)にお願いし、東京都大田区に事務所を設けました。目指すは、

散走の国内・世界への普及と散走を育む人材養成、地域での活動推進ですが、当面、全国の散走に関する取り組みや団体をつなぐプラットフォームをつくりたいと思っています。

すでに進めているのが「散走伝道師」の養成と普及事業。「散走伝道師」とは、散走を通じて自分の暮らす地域の魅力発信と自転車の安全利用の普及を行う「地元愛あふれる人」と定義しています。すでに昨年11月に静岡県の朝霧高原で、サイクリングガイドなどの経験豊富な実践者を講師に招いた養成研修会(1泊2日)を開催しており、散走伝道師に必要なスキルとマインドを学べる研修会を目指し、今年も秋に開催予定です。

さまざまなイベントを通じて散走普及に努めていますが、例えば、昨年11月には東京都大田区で開催された「OTAサイクルフェスタ」で、大野代表理事がトークセッションや体験会に参加し、散走の意義を紹介。今年4月には同区の自転車販売店さんと連携し、「バイシクルタウン東京・散走スタンプラリー」をテスト開催しました。

大田区は世界へのゲートウェイである羽田空港を擁し、自転車まちづくりに力を入れている自治体。この地を拠点に東京湾岸エリアに取り組みを広げ、世界に向けて散走の魅力を情報発信していけたらと考えています。

「ソーシャル×散走」企画コンテストをはじめ、これまでの散走に関する取り組みの成果を少しでも地域に生かせるようにしたいですね。私自身、プレーヤーの一人として散走を楽しみながら情報を共有する場を広げていきたいと思っています。



2022年11月「OTAサイクルフェスタ」前大田区長を囲んで、大野代表理事と国交省金籠参事官ステージ登壇

第5回「ソーシャル×散走」企画コンテスト 北海道参加者報告会

dec地域政策研究所 所長 原文宏

開催概要

【日 時】令和5年2月11日(土曜日)
13時30分～16時00

【場 所】(一社)北海道開発技術センター 大会議室

【主 催】(一社)北海道開発技術センター
(一社)シーニックバイウェイ支援センター

【協 力】(株)シマノ



第5回「ソーシャル×散走」企画コンテストについて

(株)シマノ企業文化コミュニケーション部 文化推進課 阿部 竜士さん

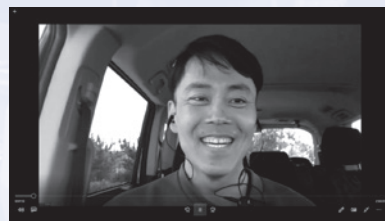
最初に(株)シマノの概要、コンテストに至るまでの経緯、実施方法の変遷等が紹介されました。「ソーシャル×散走」の発想は、(一社)ソーシャルプロダクツ普及推進協会の展示やソーシャルプロダクトアワードの授与式を、シマノが運営する自転車文化の情報発信拠点「Life Creation Space OVE」(東京都港区南青山)で開催していたのがきっかけだそうです。

コンテストの目的は、散走を通じて「環境、交流、健康」をテーマに、地域の魅力発見や社会課題の解決につながる持続可能な街づくりを育むことです。過去5回のコンテストの中では、参加人数、参加チーム数、参加大学数、いずれも

「散走」は、散歩のように自転車に乗って、その時々のお出合いを楽しむ自転車の楽しみ方です。このような散走と“環境・交流・健康”をテーマに持続可能な地域社会を育むことを目的とした散走企画のコンテスト(大学生対象)が行われ、全国から40チーム149名の応募がありました。

decとシーニックバイウェイ支援センターは、道内の大学への参加案内や参加チームへのアドバイスなどで協力をしました。その結果、北海道から4校5チームが応募し、うち2チームがファイナル6チームに残り、その2チームに大賞、特別賞を授与されました。

このような結果も踏まえ、北海道から応募された企画のうち4チームに集まっていたら、企画を机上で終わらせることなく、実際のフィールドに具現化するために、関係機関や関心のある皆様が生徒たちと一緒に推進していくための場として報告会を開催いたしましたので、その概要と個人的な感想を含めて紹介します。



今大会が最も多い大会になりました。

応募作品は、いずれも甲乙つけがたい企画内容だったようですが、北海道からの応募企画である「みつけて余市」が大賞、「CYCLRENOVATION HAKODATE～タイムスリップできるまち函館～」が特別賞を受賞したことから、それぞれの評価された点について紹介がありました。

その後、他の北海道の2チームについてのコメントや、ファイナルに残った他大学の動向が紹介され、最後に北海道から応募された企画の実現に強い期待を述べられました。

応募企画発表会

藤女子大学人間生活学部人間生活科：「石狩×散走」

石狩市をフィールドに、新型コロナウイルスの影響による観光客の減少という課題設定で、まずは石狩市民に石狩の魅力を知ってもらうことを重点に企画されています。具体的には、石狩市の自然や歴史を学ぶ、子供の課外授業に親も参加してもらい、地域の魅力を親子で再認識してもらう散走企画です。住民にとって身の回りのことは、日常であり、その魅力に気が付かないのが一般的ですので、街づくりの基本というような企画だと思います。応募グループの面々も、初めて知ることが多く、沢山の気づきがあったよう

です。また、電動アシスト自転車の乗り心地の良さに全員、感嘆していました。

ただ、課題設定が観光客の減少ですので、この取り組みを起点に観光誘客に繋げていく道筋を具体的に検討してほしいと思ったのと、子供の課外授業を活用する上で小学校と連携した推進体制等も組み込むことで、企画内容が、より明確になるように感じました。



北海道科学大学未来デザイン学部メディアデザイン学科：「yofukashiYOICHI -よふかしよいち-」

余市町をフィールドに、人口減少と高齢化、通過型観光、ニッカウキスキー余市蒸溜所への観光客の一集中を地域課題とし、高速道路の延伸や将来の新幹線の開業による札幌市や新千歳空港からのアクセス性の良さ、

北海道らしい自然景観と食の魅力を活かした「自転車+宿泊」の散走企画です。



ターゲットとする都会に住む20代～30代のアウトドアやお酒好きの若者に、企画内容の柱は大きく3つです。一つ目は、レンタサイクルと宿泊を組み合わせた「2daysサイクリングパス&宿泊」プランの提案、二つ目は余市町のカフェ、絶景スポット、ワイナリー等を紹介した「余市よってマップ」の作成、そして三つ目が「余市フレンドリーマーク」の提案です。特に、観光客と余市町民の交流を生み出す

函館大学自転車部：「CYCLRENOVATION HAKODATE～タイムスリップできるまち函館～」

函館市の「空き家」問題を社会課題として設定しています。独特の歴史文化を持つ函館市では、移住者が空き家となった文化財的な古民家や倉庫をリノベーションしてカフェやレストランとして活用する動きが見られることから、リノベーションされた古民家が集積する西部地区を散走し、歴史的な街並みや風景の中でタイムスリップしたような気分を味わうことで、移住や空き家のリノベーションに繋げようとする企画です。

特別賞を受賞した企画で、阿部さんによると全国的な課題である空き家問題をテーマに、歴史的な都市景観を活かした散走ツーリズムによって、参加者に函館の魅力を伝え、その収益を、古民家リノベーションをす

北海道科学大学未来デザイン学部メディアデザイン学科：「みつけて余市」

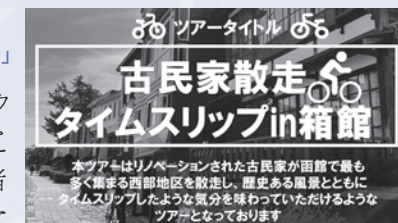
余市町を舞台に「大賞」を受賞した作品で、参加40チームのトップに評価されました。企画内容は、余市町＝ニッカウキスキー、お酒の街というイメージが強いのですが、他にもある沢山の魅力(透明のリンゴ、新潟鮮魚店等)を、散走と組み合わせることで、余市にくる観光客を増やすとともに、地域住民との交流を促進して関係人口を増そうとする意図です。

阿部さんによれば、どこにでもある観光マップというツールを使って、参加者(観光客)が散走しながら、地域住民との交流を通して、気に入った場所をマップに記入し、オ

「余市フレンドリーマーク」の提案は面白いと思いました。ツアー企画としての完成度が高く、このまま実行できるレベルだと思います。さらに、企画書のデザイン性も秀逸でWEBやポスターに使えるようなロゴやイメージが出来上がっていることに驚きました。ただ、お酒と自転車の組合せの部分で、試飲できないことと、購入したときのデリバリーへの配慮が加わるとさらに良かったと思います。

める「荘プロジェクト」に寄付することで、移住や若者の起業等につながり、空き家問題の解決の一助としようとする着眼点が評価されたようです。

ターゲット層を、函館市に移住を検討してくれそうなシニア世代と古民家リノベーションでおしゃれなライフスタイルを求める若い世代としています。一般的な観光情報サイト等では、的確に情報提供を行うことが難しい層なので、函館市の移住担当部署等と連携した体制づくりが重要と思いました。



オリジナルの観光マップを創り、公開することでお互いに魅力を伝えあう仕組みがユニークであり、他の地域での展開など汎用性も高いことが評価されたそうです。

私も、企画テーマとしては、よくある内容だと感じましたが、余市町の方々に丁寧にヒアリングされて課題や魅力を適確に把握していること、マップのデザインも素敵で、町内の関係機関との連携体制も調査を通じて構築できていることなど、実現可能性がとても高いと感じました。



意見交換と交流

企画のフィールドとなった余市町、石狩市、北海道開発局等の行政関係の方々と、ポロクルやサイクリング協会など自転車関係の皆様にも集まっていたら、質疑や実現に向けた意見交換を行いました。

余市町や石狩市の観光協会や市の関係者も企画内容を高く評価しており、既存の各々の事業の中でも、企画内容に取り込める要素が多いという認識で、レンタサイクルやガイド等の課題はあるが、実現に向けて連携して取り組んでいきたい意向が示されました。

函館市については今回の企画メンバー全員が就職他

で函館を離れることが、実施に向けた課題だったのですが、市内で自転車を使った地域づくりを進める団体に継承することで、実現の可能性ができました。

意見交換のあと、会場で交流会を開催したところ他大学の学生同士が会う機会が新鮮だったようで、学生同士が盛り上がり、楽しいひと時となりました。

このような場を、今後も継続しながら、学生たちの散走企画を具現化すべく、decもシーニックバイウェイ支援センターと連携して積極的に支援していきたいと考えています。

寄稿

北海道サイクルルート連携協議会の活動

国土交通省 北海道開発局 建設部 道路計画課 水野亮介氏

北海道は、豊かで雄大な自然環境や生産活動の中で形成された農村風景、独自の歴史・文化、多様な都市、安全で高品質な農水産物等、アジアの中でも特徴的で魅力的な観光資源が存在しています。

北海道が今後も持続的に発展していくためには、こうした強みを活かし、国内外からの来訪者の受入環境等の整備や、多様な観光メニューの充実等により、北海道の魅力をさらに磨き上げていくことが重要です。

そこで、北海道開発局と北海道および北海道商工会議所連合会、北海道観光振興機構、シーニックバイウェイ支援センター、北海道運輸局により「北海道サイクルルート連携協議会」を設置し、アジアの中でも特徴的で魅力的な北海道の観光資源を活かしながら、サイクリングを楽しめる環境を高めていくことを目的として、官・民をはじめ多くの関係者が連携・協働する取り組みを推進しています。

背景と経緯

～全国に先駆けて試行を開始～

2016年に閣議決定された第8期北海道総合開発計画において、北海道の強みである「食」と「観光」を戦略的産業として育成し、豊富な地域資源とそれに裏打ちされたブランド力など、北海道が持つポテンシャルを最大限に発揮させることにより「世界の北海道」を目指すこととされました。

また、全国的には、2017年に自転車活用推進法が施行され、これに基づき策定された自転車活用推進計画では、「サイクルツーリズムの推進による観光立国の実現」に向けて取り組むことが位置づけられました。

こうした中、2017年に「北海道のサイクルツーリズム推進に向けた検討委員会」を設置し、アジアの中でも特徴的で魅力的な北海道の観光資源を活かしながらサイクリングを楽しめる環境を高めていくための検討に着手し、20017～18年度の2年間、試行を実施しました。

この試行結果を活かした取り組みを本格展開するため、2019年に官民および多くの関係者が連携・協働する枠組みを構築し、北海道における世界水準のサイクリング環境の実現に向けて、安全で快適な自転車走行環境の改善、サイクリストの受入環境の充実、情報発信等の取り組みを推進する体制を整えました。

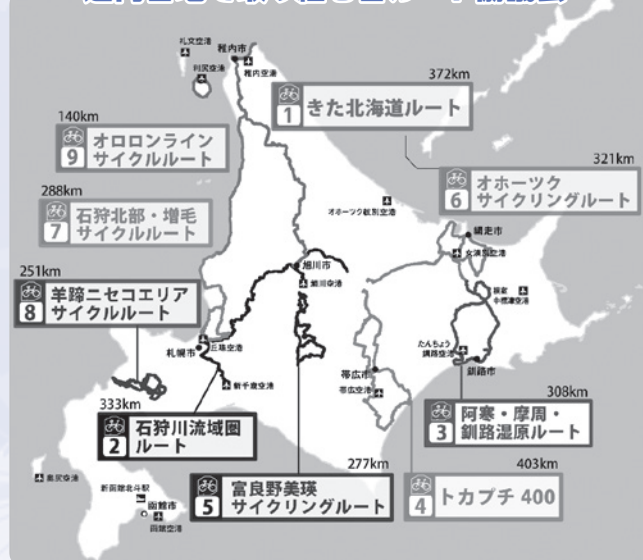
推進の枠組み ～北海道サイクルルート連携協議会設立と各ルートでの本格展開～

上記を踏まえ、2019年8月、全道的な体制として多くの関係機関からなる「北海道サイクルルート連携協議会」を設立しました。

北海道サイクルルート連携協議会においては、目指す姿や具体的な取り組み方法を示す共通の指針として「北海道のサイクルツーリズム推進方針」を策定しました。また、策定した推進方針に則り、北海道サイクルルート連携協議会と連携・協働して、質の高いサイクルツーリズムを提供する「ルート協議会」を募集しました。ルート協議会は、各地域の民間団体、サイクリスト、行政等により構成され、サイクルツーリズムに関する各種取り組みを実践する活動団体となります。

2019年11月には、連携協議会の下に有識者による「アドバイザー会議」を設置し、各ルート協議会との意見交換や現地視察を通じて、先進的なサイクルツーリズム環境の実現に向けた広範な助言を頂いています。

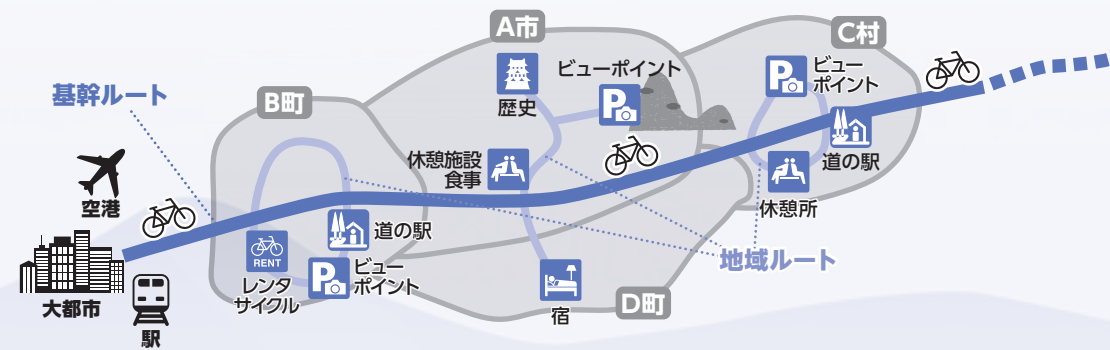
道内各地で取り組む各ルート協議会



～北海道のサイクルツーリズムの目指す姿や具体的な取り組み方法を示す共通の指針「推進方針」～

(1) 基本的な考え方

各地域のサイクルルートは「基幹ルート」と「地域ルート」により構成することとしました。「基幹ルート」は、広域にわたり都市間を移動する骨格となるルートであり、空港や駅、大都市と目的地を結ぶルートで、セルフガイドでの走行を想定しています。「地域ルート」は、ビューポイントや地域特有の魅力を巡るルートであり、それぞれの地域の奥深さを体感してもらえるよう工夫したコースを想定しています。



(2) 各ルート等で提供されるサービス

各地域において、関係機関連携のもと、以下について取り組みます。

走行環境

サイクリストがセルフガイドで迷わず安心して走行できる統一的なルート案内と路面表示による安全対策を実施



受入環境

サイクルラック、トイレなどが備えられている休憩施設を一定間隔で設置。また、緊急時のサポート体制を確保



情報発信

ルートの魅力や休憩施設等の情報発信やサイクリストからの意見を把握



現状とこれから

～世界水準のサイクリング環境の実現に向けて～

北海道サイクルルート連携協議会、ルート協議会では、これまでの各取り組みとして、前述した走行環境の整備、受入環境の充実、情報発信のあり方の検討を進めています。2022年度の主な取り組みとして、走行環境に関しては、国道5号(倶知安町、ニセコ町)、国道39号(旭川市)、国道230号(札幌市)、国道236号(帯広市)等で安全・安心な自転車利用環境創出のための自転車通行空間整備を進めています。受入環境に関しては、セコマグループとの連携によるサイクルルート沿いのセイコーマート店舗における「サイクルラック」の設置、工具や空気入れを搭載した道路パトロールカーによりサイクリストをサポートするサイクリスト応援カー、自転車積み込みによるサイクリトレインのモニターツアーへの参加等に取り組んでいます。情報発信に関しては、各種イベントの開催やイベントでのPR、プロモーション動画の作成等に取り組んでいます。

北海道内ではこれまで8箇所のルート協議会によるサイ

クルルートが道内各地で活動しています。

そのうち「トカプチ400」は、自転車を通じて優れた観光資源を有機的に連携するサイクルツーリズムの推進により、日本における新たな観光価値の創造、地域の創生を図り、世界に誇りうるサイクリングルートである「ナショナルサイクルルート」として、2021年5月31日に北海道で初めて指定されました。

また、留萌地域の増毛町から天塩町の8市町村を繋ぐ約140kmに及ぶサイクルルートで、既存のサイクルルートとの接続により道央・上川・宗谷地域における広域サイクルネットワークが構築される「オロロンライン・サイクルルート」が2022年度、新たに加わりました。

北海道における世界水準のサイクリング環境の実現に向けて、多くの関係機関や各ルートの皆様方とこれからも連携し、サイクルツーリズムを通じて多くの方々に北海道を訪れてもらえるよう、今後も引き続き、積極的に取り組みを進めていきたいと思ひます。